

談話教育のための一試案

－タクティクスの方式による談話構造の記述の有効性－

金 秀 英*

目 次

1. はじめに
 2. 談話と談話教育・談話管理能力
 3. 談話教育・会話教育に関する先行研究
 4. 新たな談話教育模索のために：「基本構造」という考え方
 5. タクティクスの方式による談話構造の記述
 6. 「社会的関係」とタクティクスの配列：「断り」談話の日・韓比較
 7. 今後の課題
-

1. はじめに

外国語学習者が突き当たる言語問題の一つに、言葉を文脈や談話の中で理解し、その場面に応じて適切な談話を生成する、というものがある。しかし、適切な言語行動（あるいは非言語行動）を行うことは容易なことではなく、場面に合わない言語表現を選択したり、談話の組み立て方が効果的でなかったりすることがしばしば起こる。学習者が文法事項を含め、言語形式とその意味は学習しているにもかかわらず、それだけでは現実場面において円滑なコミュニケーションを行うことができない場合があるのはなぜだろうか。

現実場面で日常発せられる発話は、言語形式から読み取れる意味の他に、発話者の意図を表現すべく、何らかの機能を担っている。そのため、話し手が発した発話の言語形式が表す直接的な意味だけでなく、その言語形式が用いられた場面・状況から判断される話し手の意図した意味も理解して初めてコミュニケーションが成功する。

一方、学習者は学習状況の制約から、目標言語の運用の側面が不足しがちである。即ち、従来の限られた時間内の教育では、語彙や文の形式上の正確さが優先され、場面によって適切な言語行動をするといった言語の運用面は後回しになりがちであった。そのため、学習者は言語形式は知っているとしても、使うべき文脈やその表現が示す意図や担う機能が把握できないため、教室外での実際の会話でうまくいかなくなる。

このように、コミュニケーションの観点から学習者が実際の会話場面でなぜうまくいかないかを検討すると、浮かび上がってくるのは談話教育に対する認識不足という現状であろう。

現実のコミュニケーションは談話の形をとっている。話しかけることによって相手の注意を促し、話すべき内容を述べた後、相手は何らかの応答を示す、といった一連のまとまりがある。依頼や誘いなどの発話行為にしても、発話

* 名古屋外国語大学 大学院 日本語教育

は単独の文だけでなされるというより、まとまりをもった談話の中で発せられるはずである。

従って、これまでの単文あるいは連文を範囲とする文法中心の教育に加えて、場面や人間関係を考慮して如何に適切な表現を選び出すか、選択した表現を如何に効果的に組み立てるかなど、談話に関する知識をいかに学習者に分かりやすく指導するかは、日本語教育上、非常に重要なポイントとなる。

本研究は、談話教育の目的を、談話の全体構造を意識化でき、その構造を成り立たせる個々の構成要素を実現できる能力（後述の談話管理能力）の習得であるとした上で、そのためには何が学習されるべきかについて考えることを目的としたものである。

その目的のために、ここでは、（１）まず、従来の談話教育・会話教育に関する先行研究の評価を行う。（２）次に、先行研究の限界を克服し談話の構造について体系的に把握し意識的な学習を行うためには「タクティクス」¹⁾（単位方略）の方式で談話構造を記述することが有効であることを提案する。

2. 談話と談話教育・談話管理能力

はじめに本研究で用いられる用語の定義をしておく。

（１）「談話」のとらえ方は、談話研究に携わる各研究者の関心、学問的背景などによって様々である（南1983, 橋内1999, 宇佐美1999など）が、ここでは国語研（1994：185）の定義をもとに「談話」を、「接触の開始と終了、またはその間の参加者の変化、話題の大きな転換などによって区切られる一連の伝達において発せられたまとまりの言語表現」と定義する。従って、「談話教育」は、談話レベルのテキストの

理解や生成

に関わる学習であると言える。

（２）「談話管理能力」とは、以下に列挙する能力を含むものとする。

- ① 談話の全体構造を意識化でき、その構造を成り立たせる個々の構成要素の適切さを判断できる能力
- ② 伝達される意味を理解し、全体としての意図を把握する能力
- ③ ある場面において上記のような過程を適切に遂行する能力

3. 談話教育・会話教育に関する先行研究

談話能力の育成や会話教育については、すでにいくつかの考察・研究がある。

（１）岡崎敏雄（1987）は、「日本語学習者がかかえている問題に談話の能力に関わるものが多い」とし、その原因の一つとして教室での学習の限界に触れ、それを改変し

1) 国立国語研究所（1994：185）によると、「タクティクス」は実現する談話の各部分に相当する類型化された行動様式で、さまざまな機能を担う談話構造上の単位である。なお、第二言語習得研究の分野で用いられる『コミュニケーション上の問題を解決するための手段を指す』（Long 1983）「タクティクス」とは異なる用語。

ていくためには「聞き手中心の談話の指導」が必要であることを指摘している。それまで談話指導の必要性は多く指摘されて来ていたもの（水谷修1981, 水谷信子1982など）日本語の談話の実態にみあった指導原理を立て、それに即した指導内容と方法を構成し、実践した研究としては、先駆的なものといえる。

- (2) 会話教育の現状に関する論考としては畠（1988）がある。畠は、会話ストラテジーを「コミュニケーションを行うために必要でありながら、コミュニケーションの内容に積極的に関与しない部分」「コミュニケーションを円滑に行うために必要な部分」（p. 109）と規定し、会話ストラテジーのリストを提示した。このリストは会話教育のシラバスを考える上で画期的な業績であるが、異質の項目が未整理のまま並べられているとの批判がある。
- (3) 谷口（1989）は、会話教育に対する畠の立場を支持しつつ、会話ストラテジー・リストに「言語行動、機能、ストラテジーが入り交じって出ている」（p. 264）と指摘し、Canale（1983）の枠組みを援用して畠の提示した会話ストラテジー・リストの整理を試みている。このリストも検討、整理の余地が残されていると考えられる。
- (4) 尾崎（1996）も、畠、谷口と同様、「会話教育とは技能教育であり、会話を円滑に進めるために必要とされる技術を身に付けさせるものでなければならない」とし、会話の展開に関わる技術とコミュニケーション問題を処理する技術の再整理を試みている。これは日本語会話の教育で取り上げるべき項目を整理したものであり、基本的な枠組みを提示しているものとして評価できる。

これらはいずれも、4. で述べる意味での談話の全体的な構造を視野に入れていない点で談話教育の内容を網羅するためには不十分であると考えられる。また、談話の全体的構造を視野に入れていても、具体的にこの種の談話はこういった構造をもつ、といった具体的な議論には及んでいない感が拭えない。そのため、談話の全体の計画性、つまり、学習者がある場面に遭遇した際に、あるいはこれからあるタスクを遂行しようとしている際に、自分が置かれている状況やこれから行おうとしているタスクを認識し、予測をもってある場面を管理する能力の学習を保証し得ないと思われる。つまり、場面を構成する要因やどういう内容をどういう順序でならべるといった基本構造の構想が欠けているといえよう。

4. 新たな談話教育模索のために：「基本構造」という考え方

本研究の大前提として、ジャンル（談話種別）ごとに基本構造があるという立場をとる。いかなる言語においても、現実に現れる談話の姿は非常に多様であり、その構造に規則性を認めることは一見困難である。しかし、母語話者の意識の中には、例えば、こういう種類の談話ではこうすべきだという共通認識があり、現実の多様な談話はそうした「基本構造」の実現として表われると考えられる。現実の談話の現れ方にバリエーションがあるとしてもその現れ方にはある程度の規則性がある。基本構造という考え方は、バラバラに現れる現実談話に規則性を求めるものであるといえる。

例えば、現行の日本語教科書で提示される「モデル会話」の類にはジャンルごとに認められるある程度一致した基本構造の認識が見られる。しかし、多くの教科書はモデル会話を全体として提示するに留まっており、その構造

の分析にまで踏み込んでいない。談話の全体の構造を視野に入れた新たな談話教育の模索の必要性は、このような現状にもみとめることができる。

ジャンルごとに「基本構造」があるとの立場をとる理由の一つとして、教育内容の整備という教育上の目的がある。つまり、教育現場では談話の実態を教えるわけではない。それは現実的に不可能なことである。

したがって、学習者に談話構築能力を学習させるためには、さまざまな種別の談話構造を構成単位（タクティクス；後述）に分析し、その一つ一つを学習者に提示することが有効であると思われる。つまり、タスクの種類ごとに基本的・典型的な遂行手順をタクティクスに分析し、それを意識的に学習させることによって、学習者が未体験の場面に遭遇した場合にも既習のタクティクスを応用して対処する能力を身に付けさせることができると期待される。

本研究では、上記のような認識に立ち、談話の構成単位として〈タクティクス〉を用いた記述の方式が教育上有効であることを提案する。

5. タクティクスの方式による談話構造の記述

以下では、まず〈タクティクス〉という枠組みについて説明した後、タクティクスを用いて談話構造を記述する方式を紹介する。分析に用いる談話例として、『日本語教育映像教材 中級編（以下『中級編』）』（国語研1994）の「依頼」談話と電話で収集した日本語と韓国語の「断り」談話（以下「日・韓『断り』談話」）の構造の記述を紹介する。なお、『中級編』からとった例の出典は『中級編』の標示に従っている。たとえば、「seg. 05①-(2)」は、セグメント5の場面①の第2部を表す。

5.1 タクティクスとは

ある場面におけるタスクを遂行する行動のうち、ことばを用いたインターアクションの側面は、談話の形で実現する。その談話は、いくつかの構成要素の連続として分析することができる。以下に例を示す（データについての詳細は6.1参照）。

<例1> (「日・韓『断り』談話」, J, 女性同士, 対目下の会話, Aがベース)

A: 明日明後日さ,	
B: はい,	
A: 私の代わりにバイトしてく, くれるかな.	【行為の依頼】
B: 何時からでしょう.	《情報提供要求》
A: 一日中.	【情報提供】
B: 一日中. [驚き]	《意向表明への否定的な注目表示》
A: うん, 明日も明後日もなんだけど.	【情報提供】
B: ちょっと待って明日は金曜日, 明後日は土曜日.	《意向表明への否定的な注目表示》
A: 9時から, 5時までそのつもりで東京来たんだけどどうも…….	【事情の説明】
B: ちょ, ちょっと無理ですね.	《直接的断り》

【 】は働きかけ側(依頼する), 《 》は受け側(依頼を断る)のタクティクス

これは, 後輩に自分の代わりにアルバイトをしてるように頼んでいる場面である。まず, 先輩Aが後輩Bに「自分の代わりにバイトをしてくれないか」と依頼をしている。それに対して, Bが「バイトは何時からか」とアルバイトの時間を尋ねる情報提供要求をする。そうすると, Aは「1日中」と情報提供をする。それを聞いてBは, 「1日中」とAの発話を繰り返す。出された情報提供などに対してそれを受信したことを示すために発せられる「そうねえ」のような類の発話を<注目表示>という用語で呼んでいるが, ここでBの発話「1日中」は, 相手が表明した意志・意向を受信したことを示すと同時に否定的反応を伴うものでこれを<意向表明への否定的な注目表示>と呼ぶことにする。その後, Aは「あした, あさってもそのバイトを代わりにやってもらわなければいけない」と情報を提供する。それを聞いて, Bは独り言のようにあしたとあさってが何曜日だったかを確認する。これも相手の発話を受信したことを示すと同時にこれに対する反応として<意向表明への否定的な注目表示>である。さらに, Aは自分がどうしてどうして上京したかを説明する<事情の説明>がくる。これに対して, BはAの依頼を断る。

これは依頼があって, それに対する反応として情報提供要求があって, 情報提供と与えられた情報に対する否定的な反応が2度繰り返されて, それでもまた自分がどうして東京に来たのかの説明があって, それでもまた断られるという談話である。

具体例としてのこの談話は, 「【行為の依頼】→《情報提供要求》→【情報提供】→《意向表明への否定的な注目表示》→【情報提供】→《意向表明への否定的な注目表示》→【事情の説明】→《直接的断り》」という手順によって遂行されている。つまり, 「依頼に対する断り」という談話は【行為の依頼】, 《情報提供要求》, 《意向表明への否定的な注目表示》, 【事情の説明】, 《直接的断り》のような種類のパーツが, 上記のような順で並ぶことによってできている。

談話の構造は, このように, 何をしている, 何をしている, というラベルを各部分に付けていくことによって, 捉えることができると思われる。そして, このひとつひとつを談話全体を構成している単位とし, 国語研(1994)等では<タクティクス(単位方略)>と名づけている。

たとえば, <情報提供要求>というタクティクスの実現のし方を心得ていれば, この「依頼に対する断り」という種類の談話以外にも, もっと別の種類の談話の中でそれが使えるようになっていこうし, 自分の行動様式としてそういったタクティクスのレパートリーを増やしていくことは, 重要な学習内容となりうると思われる。

また, タクティクスは, 談話構造上の単位として仮定される抽象的な単位で, 実際の談話の中においては必ず何らかの言語的・非言語的な選択肢の中から選択される。例えば, 上記の<意向表明への否定的な注目表示>

の場合は、「1日中」（依頼の一部を繰返す）、「ちょっと待って明日は金曜日、明後日は土曜日」（独り言をいう）の形で実現していたが、他にも例えば、「うーん」、「あー」など、後に続く発話が相手の期待に対し、否定的な内容が続くことを予想させるものや、沈黙、相手の顔を見る、目をそらす、笑う、その場を去る、などの非言語的手段によっても実現することができる。

5. 2 基本構造とその実現としてのバリエーション：「依頼」談話の場合

「依頼」は、単に「～ください」とか「～お願いします」といった文を口にするのではなく、構造を持った談話を実現する行動である。ことばを用いてこうした行動を適切に行うためにはまず、「依頼」談話の基本構造をタクティクスの配列として分析的に意識し、「依頼」談話を構成する単位であるタクティクスの種類やその実現形態を学習することが必要である。

ここでは、出現するタクティクスの種類とその配列によって「依頼」談話の構造を記述する方式を紹介する。まず、「依頼」談話に出現するタクティクスの種類にどのようなものがあるかを述べる。次に、「依頼」談話の基本構造とその実現としてどのようなバリエーションがあり、そのバリエーションに関する要因にどのようなものがあるかについて例をあげながら考察する。

5. 2. 1 「依頼」談話を構成するタクティクスの種類

「依頼」は、相手の好意に期待して行為を行うよう求める談話である。相手に対する強制力がなく、「指示」に比べてはるかに慎重に行うべき行為要求である。要求を受け入れられやすくするために、事情の説明や交換条件の提示、相手の負い目の指摘などが含まれやすい。依頼される側から見ると、依頼を断ることは、相手の顔をつぶす行為となるから、これも慎重にならざるをえない。了解・拒絶にいたる以前に代案の提示、条件の提示などが行われることも多い。了解された場合、それに続いて、依頼されたことの実行に関する発話や実際の行動が含まれることが多い（国語研1994：215）。

「依頼」というタスクを遂行する場合、そこには少なくとも次のような<タクティクス>が含まれる。ここでは、国語研（1994）で用いられている名称によって記述する。

- (a) 話題の開始（接触の開始）：依頼内容を提示する前に例えば、「おじさん、今日はちょっと」と、頼みがあって」のような前置きか来る場合がある。
- (b) 依頼内容の提示：まず、第一段階では、何を頼むのかという依頼内容を提示する。
- (c) 事情の説明：それはなぜ必要なのか、なぜその相手に頼むのかを説明する。
- (d) 情報提供要求：相手の依頼内容提示や事情の説明を聞いて、さらに詳しい情報を要求する。
- (e) 情報の提供：相手の情報提供要求に答える。
- (f) 要求への了解：依頼を受け入れる。
- (g) 感謝の表明：依頼を受け入れてくれたことに対し、相手に感謝の気持ちを述べる。
- (h) 要求への拒絶：依頼を受け入れない。
- (i) 受諾の要求：相手が断わりにでた場合、さらに頼みこむ。
- (j) 提案の提示：条件をつけたり依頼内容を変えたりする。
- (k) 行為要求の撤回：さらに頼み込むことが難しければ、失礼にならないように引き下がる。
- (l) 話題の収束：依頼のタスクを終了する。

実際のタスクに対応するタクティクスを組み立てるためには、これらの中から適当なタクティクスを選択・配列するこ

となる。その選択・配列は、場面を構成する要因によって変わってくる。

5. 2. 2 「依頼」談話の基本構造とその実現としてのバリエーション

国語研（1994：215）は、「依頼」談話の基本構造を以下の〈図1〉のように規定している。

K C I

【図1】「依頼」談話の基本構造

行為の依頼→(説明の要求)→事情の説明→(提案の提示)→要求への了解(→感謝の表明→行為の申し出/提案の提示)/要求への拒絶(→提案の提示→受諾の要求/行為要求の撤回)→話題の収束

しかし、実際の会話を観察して見ると、このような基本構造どおりに会話が遂行されることはほとんどない。むしろ以下の〈例2〉や〈例3〉のように、いきなり〈行為の依頼〉から始まる談話は少なく、最初に導入として、自分の状況を説明したり、相手の状況を尋ねるなどのやりとりが観察される場合が多い。

どのタクティクスを選び、それをどのような順序で配列するかは、話し相手、場面、ことの重大さ、話し手の個性、学習者の場合は日本語能力、ポライトネス(円滑な人間関係を保持するための意欲、態度)などの要素に影響される。

〈例2〉『中級編』seg.11③-(2)(タスク:母親にジュースをねだる)Ⅲ動能的談話◇依頼

敬一 【事情の説明】074 ああ、のど、乾いた。
泰子 《行為の勧め》075 お水、飲んでらっしゃい。
敬一 【行為の依頼】076 ジュース、買ってよ。
まゆみ 《行為の依頼》077 わたしにも買ってよ。
泰子 《要求への拒絶》078 だめですよ。079 おうちに帰ればあるでしょう。
敬一 《意向への不同意》080 ちえっ。081 つまんないの。

例えば、取引をしてほしいよう依頼する〈例3〉の場合、〈行為の依頼〉が現れる前に依頼を受け入れやすくするため、〈事情の説明〉〈説明の要求〉〈情報の叙述〉のようなやりとりが観察される。

<例3> 『中級編』 seg. 06②-(2) (タスク：取引をしてくれるよう依頼する) III 動能的談話◇依頼

《導入：依頼を受け入れ易くするための事情の説明》

- 中村 【事情の説明】 044 さっそくですが、わたくしどもの会社は、長年、繊維を中心に扱ってまいりました貿易会社でございます。
- 岸本 《情報提供への注目表示》045 ほう……. 046 創業60年ですか. 047 大変立派な会社ですね。
- 中村 【事情の説明】 048 いえ、まあ、なんとかやってきた会社ですが、数年前から、センサーの輸入と国内販売を始めております。
- 岸本 《説明の要求》049 ほう. 050 センサーといますと…….
- 中村 《事情の説明》051 はい、光学センサーが中心となっております. 052 このたび、アメリカのスミス&スミス社の代理店となりましたもので、機械部を新たに設けまして、そちらの方にも力をいれていく方針でございます。

《付加的情報の叙述》

- 中村 【情報の叙述】 054 やはり、繊維だけでは、なかなか難しいものですから。
- 岸本 055 ふん…….

《依頼》

- 中村 【行為の依頼】 056 そこで、新しい部ができましたのを機会に、なんとかこちら様ともお取引願いたいと思、いまして、ご挨拶に伺ったような幸いです。

<以下略>

また、基本構造に含まれるタクティクスが欠落したり、必須でない要素が含まれることによって、話しの内容が全然違う方向に流れる場合もある。

例えば、下記の<例4>では、<行為の依頼>を切り出す前に、<要求への拒絶>がきている。その後、断わる<事情の説明>や、仲人を頼む依頼を断わる代わりに他の人を頼んでみるように勧める<提案の提示>のような非必須の要素が観察されるなど、話しの内容が基本構造とはまったく違う方向に流れている。

《開始》

雄二 【話題の開始】001おじさん、今日はちょっと、えと、頼みがあって。

《断りと食い下がり》

おじ 《要求への拒絶》002 仲人だったら、断りだぞ。

雄二 《受諾の要求》003 おじさん、そう言わないで、頼みますよ。

喜美子 《説明の要求》004 あの、おじさま、私が前にお断りしたからなんですか。

おじ 《事情の説明》005 いや、そりゃもういいんだけどね……。006 ま、私も改まった席は苦手だしね。《受諾の要求》007 他の人にしろよ。

雄二 【事実の指摘】008 だけどね、最初に僕たちを会わせしたのはおじさんなんだから。

喜美子 【見解の表明】009 ええ、おことばを返すんですけど、わたしたちの実際の仲人はおじさまです。

(以下簡略化)

《断る理由の説明》



《問題解決のための見解の提示》

このように、あるタスクが実行された結果として現われた発話のつながりは、そのタスクが行われた場面によって異なりうる。そのため、談話の基本構造を抽出する際には、場面の性質を規定する要素にはどんなものがあるかを整理した上で、その場面におけるタクティクスの配列を分析するとともに、場面によってタクティクスの連鎖が異なる場合、場面を構成する要因の何によって違いが生まれたのかを分析する必要がある。

上述のように、母語話者の頭の中に、その場面においてそのタスクをするためにはこうするべきだという共通認識、つまり基本構造があるとしても、実際の談話を観察してみると、そこに出現するタクティクスの種類と出現順序には多様なバリエーションがあり、基本構造に含まれるタクティクスが欠落したり、非必須要素が用いられたりすることがしばしばある。そのため、たとえば、「依頼」談話を学習項目として学習者に提示する際には、「基本構造」を提示すると共に、そのバリエーションとしてどのようなものがあり、そのバリエーションに関与する要因にどのようなものがあるかを学習する必要があるだろう。

6. 「社会的関係」とタクティクスの配列： 「断り」談話の日・韓比較

上記 5. でタクティクスの配列（実現形態の選択も同様であるが）には「人的要素」や「場面的要素」深く関わることを述べたが、ここでは日本語と韓国語の実際の「断り」談話²⁾を分析して得られた結果をもとに、特に人的要素の中の社会的関係（社会的関係やいわゆる力関係を含めた話し手・聞き手間の関係、例えば、学校の先輩・同級生・後輩）が、選択される<タクティクス>の種類やその配列どのように影響しているかについて述べる。

「断り」はその方法いかんによっては相手との間に深刻な摩擦を生み、良好な人間関係を保てなくなる危険性がある。そのため、特に「断り」の遂行に際しては対人認識（相手をどう扱うか）のあり方が強く反映する。

6. 1 データ収集及び分析の方法

データの収集においては、母語（日・韓）、性別ごとに各3名、計12名のインフォーマントに、それぞれ目上・同等・目下の相手（ここでは学校の先輩・同級生・後輩、同性同士、いずれも親しい間柄）に電話をかけ、アルバイトを依頼するよう求めた。アルバイトの中身は会話ごとに異なるが、例えば先の<例1>のようなものである。

K C I

2)) 本研究では「断り」談話を、依頼する側のインフォーマントが依頼をし、それを依頼をされる側のインフォーマントが断った後、その断りを依頼側が受け入れるまでの一連の発話とする。

【表1】調査対象（依頼側の被験者（計12名）と対話者（計36名））

依頼側の 被験者		対話者（男性）			依頼側の 被験者		対話者（女性）		
		目上	同等	目下			目上	同等	目下
J 男	JMB1 (24才)	※会話1 (24才)	会話2 (24才)	会話3 (21才)	J 女	JWB1 (24才)	会話10 (35才)	会話11 (24才)	会話12 (21才)
	JMB2 (24才)	会話4 (36才)	会話5 (24才)	会話6 (21才)		JWB2 (26才)	会話13 (45才)	会話14 (24才)	会話15 (22才)
	JMB3 (24才)	会話7 (32才)	会話8 (23才)	会話9 (22才)		JWB3 (24才)	会話16 (25才)	会話17 (25才)	会話18 (18才)
K 男	KMB1 (29才)	会話19 (33才)	会話20 (29才)	会話21 (25才)	K 女	KWB1 (27才)	会話28 (33才)	会話29 (27才)	会話30 (20才)
	KMB2 (26才)	会話22 (29才)	会話23 (26才)	会話24 (24才)		KWB2 (25才)	会話31 (27才)	会話32 (25才)	会話33 (22才)
	KMB3 (31才)	会話25 (32才)	会話26 (31才)	会話27 (29才)		KWB3 (27才)	会話34 (28才)	会話35 (27才)	会話36 (25才)

※では、同年齢であるが、社会的立場が異なる（サークルの先輩）

日本語母語話者は、東京都内の大学生，大学院生で，年齢は20代から30代である．韓国語母語話者は，東京在住の留学生（大学の研究生，大学生，大学院生）で，年齢は20代から30代前半である．日本語母語話者が日本語で話したものを「J」とし，韓国語母語話者が韓国語で話したものを「K」とする．この方法で得られた会話を文字化し，発話単位に区切った後，タクティクスの枠組みによって分類し，集計を行った．この際，発話のラベル付けの信頼性を確認するために，筆者のほかにセカンドコーダーを依頼し，筆者と同様の方法でラベル付けを行い両者の一致率（一致率0.75以上）を確認した．そのようにして，タクティクスのラベル付けがされたテキスト（〈例1〉参照）に基づき，分析を行った

6. 2 社会的立場の反映としてのタクティクスの出現頻度

このデータの範囲内では、「断り」談話を構成する要素には以下の6種のタクティクスが認定できる。すなわち、両言語ともこの6種のタクティクスのうちどれかを用いて「断り」というタスクを遂行しているといえる。

- (a) <直接的断り>: 「いいえ」「できない」「無理」「だめ」などを含む言語形式を用いて、依頼されている行為を実行することが不可能であることを明言するものがこれに含まれる。
- (b) <言語的回避>: 相手からの行為要求に対して断りの意向を直接的に表現せず、沈黙・控えめな表現などを用いて間接的に断る。
- (c) <理由の説明>: 断る理由を述べる。
- (d) <謝罪>: 依頼を受け入れない残念な気持ちを表明する。
- (e) <否定的な見解の表明>: 問題になっている事柄についての自分の否定的な判断を述べる。
- (f) <代案の提示>: 依頼を断る代わりに問題になっていることがらについての自分なりの解決策を提示し、相手の反応を待つ。

【表2】社会的関係とタクティクスの出現頻度 (単位: 回)

タクティクスの種類	J (18人)				K (18人)			
	対目下	対同等	対目上	計	対目下	対同等	対目上	計
直接的断り	4	3	4	11	4	4	2	10
言語的回避	4	3	6	13	4	4	4	12
理由の説明	6	5	4	15	4	6	6	16
謝罪	3	3	5	11	2	1	2	5
代案の提示	2	1	3	6	3	3	3	9
否定的な見解の表明	1	1	3	5	2	3	0	5

【表2】はJとKのそれぞれの会話において、タクティクスの出現頻度数をしらべたものである。これによると、以下のような傾向が見られる。

まず、「断り」という行為は、依頼されている行為を実行しない、あるいはできない意志をはっきり明言するかしないかによって大きく「直接的な断り」と「間接的な断り」の二つのグループに分けられる。本稿で分類している<直接的断り>が前者に、<理由の説明><意向表明への否定的な注目表示><謝罪><代案の提示><否定的な見解の表明>が後者に該当する。

両言語とも<直接的断り>より<理由の説明><言語的回避>などのいわゆる「間接的な断り」を用いて断りを遂行する例が多い。Jの場合、目下や同等には<理由の説明>が、目上には<言語的回避>が一番多く用いられている。一方、Kの場合、目上・同等・目下ともに<理由の説明>が多く用いられている。

次に、両言語においてその違いが明らかだったのは、謝罪のことは述べるかどうか、代案を提示するかどうかである。JがKより<謝罪>を多く用いている。これは特にJの対目上において顕著である。謝罪のことは口にする事によって相手の依頼を受け入れられないことに対する申し訳なさを表わすとともに、対目上へのプライド意識もアピールする効果があると思われる。

<代案の提示>に関しては、Kの方がJより多く用いている。提示される「代案」の内容においても両言語では

差が見られた。〈代案の提示〉は、例えば、依頼を断る代わりに、問題になっていることがらについての自分なりの解決策を提示し、相手の反応を待つものである（【表3】参照）。

【表3】〈代案の提示〉の内容（単位：回）

代案提示の内容	J (18人)				K (18人)			
	対目下 (5)	対同等 (1)	対目上 (5)	計 (11)	対目下 (6)	対同等 (8)	対目上 (3)	計 (17)
①依頼者本人がやるように言う	1	0	0	1	1	0	0	1
②他の人に依頼してみることを勧める	3	1	4	8	2	7	2	11
③一日だけならいい	1	0	0	1	0	0	1	1
④知り合いに頼んでみると提案する	0	0	1	1	3	1	0	4

両言語とも②の「他の人に依頼してみることを勧める」を一番多く用いているが、Jにおいてはあまり用いられない④の「知り合いに頼んでみると提案する」がKの特に対目下において用いられていることは注目に値する。このことから、断る代わりにお世話をしあげるとい目上の対目下への思いやりや責任感のようなものが感じ取られる。

6.3 社会的関係の反映としてのタクティクスの出現順序

「依頼に対する断り」というタスクを遂行する談話の基本構造は、両言語とも、最初に導入として相手の近況を尋ねるやりとりなどが観察され、その後、相手にアルバイトを頼むく行為の依頼〉が現われ、それに対して、なぜ依頼を断らなければならないかを述べる〈理由の説明〉、依頼を断わる〈直接的断り〉、依頼を断わる代わりに自分の解決策を述べる〈代案の提示〉などによって構成される。場合によっては、アルバイトの時間を尋ねる〈情報提供要求〉やそれに答える〈情報提供〉、相手が表明した意志・意向を受信したことを示すと同時にそれに対する反応としての〈注目表示〉などが挿入される場合もある（〈例1〉参照）。

両言語とも、「断り」談話の各部分をどのような順序で配列するかは、相手への社会的関係の意識と深く関わっている。【表4】は社会的関係とタクティクスの出現順序との関係を調べたものである。ここでは特に最初に用いたタクティクスが何かに焦点を当てた。

【表4】社会的関係とタクティクスの出現順序（単位：回）

タクティクス	J (18人)				K (18人)			
	対目下	対同等	対目上	計	対目下	対同等	対目上	計
「直接的断り」先行型	2	1	1	4	2	2	0	4
「理由の説明」先行型	3	3	0	6	2	3	4	9
「言語的回避」先行型	1	2	4	7	0	0	1	1
その他	0	0	1	1	2	1	1	4

【表4】からも分かるように、日本語の場合、目下・同等には「理由先行型」、目上には「言語的回避先行型」が多い。韓国語の場合、目下には〈理由の説明〉や〈直接的断り〉を同じぐらい用い、同等・目上には「理由先行型」である。

日本語と韓国語両方において、〈直接的断り〉か断りの談話の最初から用いられることは少なく、以下の〈例5〉のように、現れるとしても2番目以降に現れる例が多い。また、Jでは〈言語的回避〉、Kでは〈理由の説明〉で間接的に断りたいという気持ちをまず表している例が多い。

＜例5＞（「日・韓「断り」談話, J, 女性同士, 対同等の会話, Aがベース）

A：うんと 日曜と月曜日(かん バイト) できないかなーと思ってかけたんだけど
【行為の依頼】

B：あー, 日曜日は国語学会, があるから…….
《理由の説明》

A：あ, そうか.
【注目表示】

＜ 中略 ＞

B：うん私はちょっと日曜は学会に行きたいから
【注目表示】

A：あ, そうか.
《直接的な断り》

B：二日間は無理ーだね.
【断りへの了解】

A：あ, 分かった.

以上で述べた日・韓「断り」談話における出現するタクティクスの種類や順序の特徴をまとめると以下のようになる。

日・韓「断り」談話におけるタクティクス種類・順序の相違点	
頻度	<p>(1)全体的にJとKの出現頻度を比較してみると以下のようになる。</p> <p>① <タクティクス> を多く出現する順にならべてみると, Jは 理由の説明→言語的回避→直接的断り/謝罪→代案の提示→否定的な見解の表明の順, Kは 理由の説明→言語的回避→直接的断り→代案の提示→否定的な見解の表明/謝罪の順である。</p> <p>② 代案を出す: Jは Kに比べてあまり代案を出さない。</p> <p>③ 「謝罪」を述べる: Jに比べてKはあまり「謝罪」を述べない。</p> <p>(2)社会的関係認識と出現頻度との関係をみると, Jは, 対目上や対同等は「理由の説明」を, 対目下は「言語的回避」を一番多く用いている。一方, Kは, 対目上・対同等・対目下ともに「理由の説明」を一番多く用いている。</p>
順序	<p>全体的にJは「言語的回避先行型」, Kは, 「理由の説明先行型」であると言える社会的関係に対する出現順序の割合を比較してみると, 以下のようである。</p> <p>① 対目上: Jは「理由の説明先行型」>「直接的断り先行型」>「言語的回避先行型」 Kは「理由の説明先行型」=「直接的断り先行型」=「言語的回避先行型」</p> <p>② 対同等: Jは「理由の説明先行型」>「言語的回避先行型」>「直接的断り先行型」 Kは「理由の説明先行型」>「直接的断り先行型」>「その他」</p> <p>③ 対目下: Jは「言語的回避先行型」>「直接的断り先行型」, 「その他」 Kは「理由の説明先行型」>「言語的回避先行型」>「その他」</p>

以上, 日本語と韓国語の「断り」談話を例に, 談話の基本構造やその組み立て方には社会的関係が深く関わっていることを考察した。

7. 今後の課題

教育上の有用性を考慮して本研究では談話の種別ごとに「基本構造」を設定しようとしているが, この考え方に

は例えば談話の実態を重視する立場から異論がありうると思われる。また、例えば、「依頼」というタスクを遂行する場合はこのタクティクスをこの手順で言えばいい、といった学習をすることは危険かもしれない。しかし、学習者が「依頼」を遂行する際に、どのタクティクスをどの手順で配列すれば多くの場合うまくいく、という意識をもってその場面に臨めば、相手や話す内容に応じた対応が容易になることが期待できる。従って、談話の基本構造を学習者に意識化させることは、学習者の伝達行動を適切化する上で有効な場合が多いと考えられる。

具体的には、学習者の状態に応じて学習すべき事柄の優先順位を教授者が見定め、学習を実施することが考えられる。例えば、初級学習者の場合は、言語的に表現できる部分が限られているため、必要なタクティクスについて使用できる限られた言語的・非言語的手段の中から適当なものを選択し、タスク遂行を成し遂げることが要求される。そして、学習が進むにつれ、より整ったタスク遂行が可能になる。また、学習プロセスの中でそのような展望を学習者に示すことが望まれる。

以上の分析で分かるように、談話の構造について体系的に把握し意識的な学習を行うためには〈タクティクス〉の方式で談話構造を記述することが有効である。本研究では、学習者が目標言語使用の際に直面するさまざまな場面において自分もっている日本語でその場面に対処するためには談話構造を意識的に学習する必要があること、そのためには、〈タクティクス〉の枠組みで談話構造を記述し、それを的確に提示することが望ましいことを述べた。本研究は、学習者の談話管理能力育成のために必要な学習項目として何が有効であるか、その試案を提示した段階にあり、これからさらなる研究を進めていく必要がある。また、実際に〈タクティクス〉体系を教育現場で利用するための工夫が待たれる。

以下では、今後、進めていかなければならない作業について述べる。

まず、上に述べた方式の有効性を論証するためには、なるべくたくさんの実際のデータに当たってみる必要がある。この際、上下関係、幅広い年齢層、性別の違い、人間関係の親疎、などの条件を含む会話資料の分析が望まれる。また、日本語教育現場では、タクティクスの一覧そのものを学習項目として教育するわけではない。そのため、タクティクス体系を教育現場で実際に利用する方法の想定、教材への具体的な盛り込み方の想定や記述の方法（学習者への提示の方法）を工夫する必要がある。さらに、そのため、タクティクスの枠組みを用いて実際の授業を行い、その有効性や問題点をさぐる必要がある。

【参考文献】

- 飯田透他(1995) 「「談話を構成する力」を高めるための授業—中級学習者に対する「口頭表現」指導の可能性」『東京大学留学生センター 紀要』第5号 pp. 125-154
- 上田明子(1995) 『話せる英語述』岩波書店
- 宇佐美まゆみ(1999) 「談話の定量的分析—言語社会心理学的アプローチ—」日本語学10 第18巻 第11号 明治書院, pp. 40-56.
- 岡崎敏雄(1987) 「談話の指導——初～中級を中心に」『日本語教育』62号, pp. 165-178.
- 尾崎明人(1996) 「会話教育のシラバス再考——会話の展開と問題処理の技術を中心として」, 『名古屋大学日本語・日本文化論集』4号, pp. 119-135.
- 国立国語研究所(1994) 『日本語教育映像教材 中級編』大蔵省印刷局
- _____(1994) 『日本語教育映像教材中級編関連教材「伝えあうことば」4機能一覧表』大蔵省印刷局

- 熊谷智子 (1997) 「談話」 『日本語学』 7月号増刊号 V o L . 15 明治書院,
pp. 71-78.
- 谷口すみ子(1989)「会話教育のシラバス作りに向けて」, 『日本語教育』 68号, 日本語教
育学会, pp. 259-266.
- ネウストプニー, J・V(1994) 「日本研究の方法論—データ収集の段階—」 (『待兼山論
叢 28 日本学篇』 大阪大学
- 畠弘巳(1988)「外国人のための日本語会話ストラテジーとその教育」, 『日本語学』 7巻
3号, pp. 100-117.
- ポリー・ザトラウスキー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘の談話のストラテジー
の考察—』 くろしお出版
- 南不二男 (1983) 日本語教育指導参考書11 『談話の研究と教育 I』 大蔵省印刷局
- 水谷修 (1981) 『Japanese. The Spoken Language in Japanese Life — 日本語の生 態
—』 The Japan Times.
- 水谷信子 (1980) 「中・上級の話しことば教育」 『日本語教育指導参考書7 中・上級の指
導法』
- Canale,M(1983) Communicative competence to communicative language pedagogy, in
Richard,J.&Schmidt,R.(eds.) *Language and Communication* (pp.2-25), London: Longman.
- Long,M.H.(1983) “ Native speaker/non-native speaker conversation and the negotiation of
comprehensible in put.” *Applied Linguistics*, 4.2.:126-141.

A tentative approach for discourse teaching
—Validity of description of the discourse structure by tactics —

KIM, Su-Yeong

ABSTRACT

An important point in foreign language learning is for a learner to learn to communicate competently in the target language. In this paper I shall consider what is necessary for discourse management competence learning. This paper consists of two parts- (1)an overview of discourse teaching research.(2)a proposal that the use of a tool for describing a discourse structure known as tactics which is effective in promoting discourse management competence learning .

キーワード：談話教育，タクティクス，談話管理能力，基本構造，ジャンル，談話
構造

투 고 : 2002. 11. 29
2차 심사 : 2002. 12. 14
3차 심사 : 2003. 1. 14

住 所 : 日本国 愛知県日進市岩崎町竹の山149番地181 プロクシーフレンズ 日進 711号
電 話 : 0 5 6 1 7 - 2 - 8 2 6 4
E-mail : abi0801@hotmail.com

K C I